



BIN KONNO
今野敏

宇宙海兵隊

ギガース5

講談





講談社文庫

常州大学图书馆
宇宙海兵隊
藏ギガス5章

今野 敏

講談社

【著者】今野 敏 1955年北海道三笠市生まれ。上智大学在学中の1978年『怪物が街にやってくる』（現在、朝日文庫より刊行）で問題小説新人賞受賞。卒業後、レコード会社勤務を経て作家となる。2006年『隠蔽捜査』（新潮社）で吉川英治文学新人賞受賞。2008年『果敢 隠蔽捜査2』（新潮社）で山本周五郎賞、日本推理作家協会賞受賞。「空手道今野塾」を主宰し、空手、棒術を指導。

う ち へ いか い たい
宇宙海兵隊 ギガース5

こん の びん
今野 敏

© Bin Konno 2012



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

2012年9月14日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

本文データ制作——講談社デジタル製作部

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277146-7

目次

宇宙海兵隊ギガース5

5

第七章 遠征——メインベルトから木星圏へ

7

巻末資料集

243

イラストギャラリー

258

解説 笹川吉晴

264



講談社文庫

宇宙海兵隊

ギガース 5

今野 敏

講談社

前巻まで

22世紀、小惑星帯の彼方にまでその版図を拡げた人類は、史上初めての宇宙戦争に突入した。地球連合軍は「絶対人間主義」を標榜する指導者・ヒミカが率いる武装集団の本拠地、木星圏への侵攻を決意するが、敵は先んじて地球圏への突入を図ってきた。連合海軍最強の強襲母艦「アトランティス」と海兵隊と空軍の精鋭は、かつてない苦戦を強いられる。新型機動兵器「ギガース」を操るリーナとカーターは、その戦場で信じられない体験をする。一方、地球の日本では、終戦工作を目論む反戦派と連合保安局、海軍情報部との間で、熾烈な政治戦とスパイ戦が続いていた。

目次

宇宙海兵隊ギガース5

5

第七章 遠征——メインベルトから木星圏へ

7

巻末資料集

243

イラストギャラリー

258

解説 笹川吉晴

264

宇宙海兵隊ギガース5

●主な登場人物（ギガース5）

エドワード・カーター 大尉。強襲母艦

「アトランティス」海兵隊第一小队小隊長。

リーナ・シヨーン・ミズキ 少尉（情報部では少佐）。ギガース・ドライバー。

クリーゲル 准将。「アトランティス」艦長。

エリオット 「アトランティス」作戦司令。

オージェ・ナザーロフ 大尉。要撃戦闘機部隊リーダー、エースパイロット。

アレキサンドル 中尉。ベテランパイロット。

ジェシカ・ローランド 工学博士。「軌道屋」と呼ばれる科学士官。

ケン・ジンナイ 戦争終結へ向けて奔走する地球連合議会上院議員。

デビッド・オオタ ジンナイの腹心。

ユカワ・ナオト 日本国の野党指導者。

コニー・チャン 反戦派のジャーナリスト。

ウィリアム・コールマン 反戦派の海軍提督。

ハリー&ボブ 地球連合保安局（UNBI）

捜査官。

ベン・ワトソン 人権派弁護士。

エドガー・ホーリーランド 中將。海軍情報部のESP研究責任者。またの名をオオナムチ。

オレグ・チェレンコ 地球圏に潜入している

ヤマタイ国の高官。本名はタカメヒコ。

ヒミカ ヤマタイ国を名乗る木星圏の指導者。

第七章 遠征——メインベルトから木星圏へ

1

アトランティス

メインベルトから木星圏への惑星間軌道上

宇宙の海はおそろしく広い。

ニューヨーク級強襲母艦アトランティスを旗艦とする、同型艦のダイセツ、巡洋艦アイダホ、シャンハイ、マドラス、キプロスからなる艦隊は、およそ秒速三十キロほどの猛スピードで航行しているが、それでもずいぶんとゆつくりとした船旅に思える。

小惑星ケレスでの戦いで、ヤマタイ国の「マグ・ビーム」施設を破壊してからは、まったく戦いもなく、緊張をはらみながらも、何事もない船旅が続いていた。

おそらく、人類が初めて大洋に船出を始めた大航海時代には、地球の海でもこんな気分を味わっていたのかもしれない。

エドワード・カーター大尉は、そんなことを思いながら、ヒュームス・デツキに向

かった。

テーブルも椅子も撤去されたガンルームは、居心地が悪い。自室にはベッドがあるが、一人でいるとすぐに退屈してしまう。

カーターは、ヒュームス・デツキに来て愛機であるM2-A1・クロノス改のコクピットでしばらく過ごすのが日課となっていた。同じように時間をつぶすヒュームス・ドライバーも少なくない。

カーターは、ケレスでの戦いの記録を何度も見直していた。カーター自身の戦いについては、ほとんど問題はないと思っていた。問題なのは、リーナ・ショーン・ミズキ少尉だ。

サイバーテレパスであり、本来は海軍情報部所属で、海軍少佐の階級を持つリーナは、現在、海兵隊で最新型ヒュームス、XM3ギガースを駆っている。そのために、少尉の階級となり、事実上二重階級となっている。

これは、軍隊ではあり得ないことだが、情報部というところは、考えられないことを平気でやるところだと、カーターは考えていた。リーナ自身が軍機といつてもいい。

彼女は、ヤマタイ国の機動兵器であるトリフネの特殊な管制システムを解明し、対

抗するために最新鋭機ギガスを与えられて、最前線に送り込まれたらしい。

カーターの見るところ、その目論見はうまくいっていた。だが、ケレスではそうではなかった。

敵の管制システムに干渉しようとしたとたん、逆に攻撃を受けたようなのだ。

リーナから説明を受けたが、カーターにはよく理解できなかった。おそらくサイバ―テレパス同士の目に見えない戦いだったのだろう。その程度の認識しかできない。敵のサイバ―テレパスは、リーナをインターフェイスに使って、ギガスのOSであるムーサを暴走させたのだという。宇宙の海で搭乗機のコンピュータを狂わされるというのは、致命的なダメージだ。宇宙空間では、軌道を逸^それた乗り物はすべて、棺桶と化す。それは、アトランティスのような巨大な船も、ヒュームスのような小さな機動兵器も同じだ。

リーナのギガスは、危険な加速のため、ケレスの弱い重力を振り切り、軌道を逸脱してしまった。カーターは、それを助けるためにコンピュータと操縦系統を切り離し、手動でリーナ機を追った。

その結果、カーター機も軌道を逸れてしまった。再加速によつて軌道に戻ろうにも、推進剤が不足しているのは明らかだった。つまり、リーナ機とカーター機は絶望

的な状況に追い込まれたのだ。

問題はそこからだった。

四機のトリフネがやってきた。彼らもケレスの周回軌道を逸脱したということだ。そして、彼らは敵であるリーナ機とカーター機を軌道まで押し戻したのだ。

地球の機動兵器では絶対に不可能な行為だ。なぜ、トリフネが戦場で、リーナ機とカーター機を助けようとしたのか。そして、なぜそれが可能だったのか。

カーターは、ケレスの戦い以来、ずっと考えていた。

まったく理屈に合わない。互いに殺し合っていたのだ。その最中に、なぜ敵を助けたのか。

そこで、カーターはまた、サムのことを思い出してしまう。最初のカリスト沖海戦で軌道を逸脱し、戦死したと思われていた。だが、カーターは、戦場でトリフネに搭乗したサムと再会した。

いや、姿は見えていない。声をきいただけだ。だから、敵の心理的攪乱かくらんかとも思った。あの状況でサムを助けることは、誰にもできなかったはずだ。

だが、実際にトリフネに助けられてみると、サムも同様に救助されたとしても不思議はないと思える。

何のために敵を助けるのか。

ヤマタイ国の指導者であるヒミカが唱える『絶対人間主義』のせいだろうか。それならば、なぜ、ヤマタイ国は、独立戦争などを仕掛けて来たのだろうか。

いくら一人で考えていても謎は解けない。所詮、ヒュームス隊の小隊長に過ぎない。戦争そのものについて考えても仕方がない。当面、解けそうな謎から解いていくしかない。でなければ、考えるのを止めることだ。

カーターは、何度も見直したクロノス改の戦闘データを記憶メディアにコピーしてコクピットを出た。

*

慣性航行中、居住区は回転しており重力がある。カーターは、廊下を進み、科学士官たちの部屋が並ぶ一面にやってきた。

一瞬、躊躇ちゆうちよした後にジェシカ・ローランドの部屋のチャイムを鳴らした。すぐにドアが開き、見事なブロンドのジェシカが現れた。知的な青い眼に見つめられ、カーターはちよつとだけたじろいだ。

「なあに、海兵隊さん、何か用？」

「ちよつと見てもらいたいものがあるんだ」

「退屈してるの。面白いものなら何でも歓迎よ」

「ケレスでの戦闘データなんだが……」

「なんだ、がっかりね。もつと刺激的なものだと思つたんだけど……」

「俺には充分に刺激的だ。なんせ、死ぬところだったんだからな」

ジェシカの表情が曇った。

「無神経なこと言つてごめんなさい。でも、どうして、『軌道屋』のあたしなんか
に、戦闘データを見せたいの？」

「とにかく、見てくれ」

カーターは記憶メディアを取り出した。ジェシカは、思案顔でそれをしばし見つめていたが、やがて言つた。

「いいわ。入つて」

カーターは、部屋に入つた。科学士官の居室は、パイロットやヒュームス・ドライバーの部屋より狭い。パイロットやドライバーは、常に最前線で戦わなければならないので、生きている間はかなり優遇される。空き室になる確率が一番高いのだ。